

三 鬼の念佛親譲りの極樂

否、出て来るばかりが鬼ではなく、鬼を生むものは亦鬼である。鬼の親は鬼に相違ない。或人は、大きな鬼の相を書いて、その上に賛をした。

皆人の心の底の奥の院、開帳すればこれが本尊

私共も一念己れと怒つた其の有様は、全く頭に角がはえては居ませんか、身に鱗が逆立つては居ませんか、心に三熱の苦を感じては居ませんか。奥の院御開帳とあるから、本尊は大切な祕藏佛と思ひの外、大きな恐しい大鬼でありました。自分の外に誰も、自分の落ちる地獄の釜を鑄た鍛冶屋も居なければ、自分の生んだ鬼の外に、自分を攻める鬼も居ない。結局自分で自分の地獄を造るのであります。「心の鬼が身をせめる」とは、好く言つたもの。

そんなら極樂は如何する。こんな心では到底極樂は出来ない。今度の極樂は親譲りである。親から貰つた極樂へ、私が參るのであります。久しく魔境にあつて鬼の奴となつたのが、彌陀の親御の念力で極樂の本國に、歸る身となつたのである。この親様の念力が私に届いて、重い鬼の舌が念佛に動き、火燄を吐いた口から、大悲の尊號が現はれて下さる。

我さへも御名を稱ふる身となりぬ、鬼の念佛あやしからまじ（香樹院）

織田信茂の懺悔はこゝである。茲に如來の淨土が其儘私の淨土となる。思ふに鬼の念佛惡魔の稱名、それが眞實の宗教であります。佛が佛となり善人が善人となるに、別に不思議はない。悪人が善人となり鬼が佛となつてこそ超世不遇の本願ではありませんか。斯くて、自分が自分の地獄を造つて、自分の地獄に落つる奴が、親譲りの自分の極樂に參つて、自分が佛になるのであります。併しその間に、遣瀨ない親の念力の働いて居ることを、忘れてはなりません。